

扶桑國  
第一座

養蠶秘錄

上

內務省圖書  
 第五四九二番  
 部.....號  
 三.....冊

342  
 內閣文庫  
 和書  
 八三  
 八九八  
 七架三冊號類  
 (一)

十三ノ下

內閣文庫	
番號	和 8989
冊數	3 ( 1 )
函號	183 342

養蠶秘錄



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





養蠶秘錄序

明治十二年購京

五畝之宅樹之以桑者古先聖王所以安養斯民之制也夫桑蠶之有益于民其功固大故自古至今殖養之者尤多矣然不精知所以殖養之法則不能為其用也吾國養父郡藏垣村之里正上垣守國有慨乎此以奧

扶桑國第一產

養蠶秘錄

全部三冊





芟之蠶甲<sup>タル</sup>於諸國向者不遠<sup>キニ</sup>千里而  
往淹留<sup>キ</sup>多日察其水土之宜學<sup>テ</sup>其殖  
糶之法而歸鄉以氣多郡納屋村之  
水濱與奧州之壤地相似<sup>スル</sup>構<sup>甲</sup>居於其  
地以其所學之法殖桑養蠶共能繁  
殖因造蠶種以販于國中<sup>ニ</sup>人皆以為  
良種也於是和漢桑蠶之權輿及其

殖養之法見諸書者所親聞見者編  
彙輯錄以為三卷名曰養蠶秘錄欲  
以公于世使眾人<sup>中</sup>精知其法也示予  
需序余見而喜四方之國養蠶之地  
人雖已知其法苟曰此書而極其工<sup>守ハ</sup>  
之蜜則可益無疎漏未養蠶之地人  
雖未知其法苟亦因此書而求其工<sup>守ハ</sup>



之法則可能成調理可謂兩得焉然  
則絹繒綿絲之廣適于世用豈不多  
於前日乎亦助王政流澤之一端也  
頃日刺成為書卷首以還之云  
享和二壬戌年孟春

出石文學櫻井篤忠識



凡例

一此書之裁法蓋本於原史故事等類而採其  
擬輯錄予憶身を加ふてあふて中若遠  
學阿は是を訂す本朝卷神乃傳記を神代の  
卷を證し且神道者流乃傳説ふ傳記を此書  
卷法に多手法を回歴し五拙を致さず口授を  
需めぬが採み不利を除き宜に采日婦女  
尺易かん為画圖を顯し卷中圖説を童蒙の

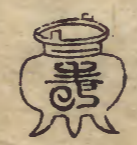


乃不<sup>カ</sup>論<sup>コ</sup>又蚕の字音<sup>カ</sup>黍<sup>シ</sup>一<sup>ク</sup>蛇<sup>ス</sup>州<sup>シ</sup>俗用<sup>カ</sup>ひ<sup>ク</sup>  
 登<sup>カ</sup>虫<sup>コ</sup>の字<sup>カ</sup>と<sup>コ</sup>ま<sup>カ</sup>る<sup>コ</sup>他<sup>カ</sup>虫<sup>コ</sup>と<sup>コ</sup>誤<sup>カ</sup>り<sup>コ</sup>用<sup>カ</sup>ひ<sup>ク</sup>と<sup>コ</sup>渾<sup>カ</sup>一<sup>ク</sup>龍<sup>コ</sup>  
 後<sup>カ</sup>に<sup>コ</sup>傳<sup>カ</sup>へ<sup>ク</sup>皆<sup>カ</sup>法<sup>コ</sup>に<sup>コ</sup>依<sup>カ</sup>り<sup>コ</sup>得<sup>カ</sup>生<sup>コ</sup>を<sup>コ</sup>演<sup>カ</sup>じ<sup>ク</sup>安<sup>カ</sup>ん<sup>コ</sup>る<sup>コ</sup>の<sup>カ</sup>  
 高<sup>カ</sup>雅<sup>コ</sup>を<sup>コ</sup>要<sup>カ</sup>と<sup>コ</sup>し<sup>ク</sup>て<sup>コ</sup>至<sup>カ</sup>る<sup>コ</sup>業<sup>コ</sup>は<sup>コ</sup>書<sup>コ</sup>ふ<sup>コ</sup>撰<sup>コ</sup>ぶ<sup>コ</sup>家<sup>コ</sup>の<sup>カ</sup>真<sup>コ</sup>の<sup>カ</sup>  
 益<sup>カ</sup>あ<sup>コ</sup>ん<sup>コ</sup>の<sup>カ</sup>覽<sup>コ</sup>者<sup>コ</sup>杜<sup>コ</sup>撰<sup>コ</sup>を<sup>コ</sup>西<sup>コ</sup>と<sup>コ</sup>ふ<sup>コ</sup>し<sup>ク</sup>る<sup>コ</sup>也<sup>コ</sup>

享味壬戌秋八月

但州大屋

上垣守國識



養蠶秘録上卷

目錄

- 日本蠶始<sup>カ</sup>り<sup>ク</sup>此<sup>カ</sup>事<sup>コ</sup>
- 中華蠶始<sup>カ</sup>り<sup>ク</sup>里<sup>コ</sup>乃<sup>コ</sup>事<sup>コ</sup> 附<sup>カ</sup>り<sup>ク</sup>晋<sup>コ</sup>揚<sup>コ</sup>泉<sup>コ</sup>蠶<sup>コ</sup>賦<sup>コ</sup>之<sup>コ</sup>解<sup>コ</sup>
- 蚕<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>異<sup>コ</sup>名<sup>コ</sup>并<sup>コ</sup>蚕<sup>コ</sup>數<sup>コ</sup>品<sup>コ</sup>あ<sup>コ</sup>れ<sup>ク</sup>事<sup>コ</sup>
- 天<sup>カ</sup>竺<sup>コ</sup>霖<sup>コ</sup>異<sup>コ</sup>大<sup>コ</sup>王<sup>コ</sup>此<sup>カ</sup>事<sup>コ</sup> 附<sup>カ</sup>り<sup>ク</sup>蚕<sup>コ</sup>居<sup>コ</sup>起<sup>コ</sup>異<sup>コ</sup>名<sup>コ</sup>の<sup>カ</sup>事<sup>コ</sup>
- 蚕<sup>カ</sup>連<sup>コ</sup>見<sup>コ</sup>様<sup>コ</sup>の<sup>カ</sup>事<sup>コ</sup>
- 日<sup>カ</sup>毒<sup>コ</sup>忌<sup>コ</sup>此<sup>カ</sup>事<sup>コ</sup> 并<sup>カ</sup>り<sup>ク</sup>野<sup>コ</sup>振<sup>コ</sup>の<sup>カ</sup>事<sup>コ</sup>
- 日<sup>カ</sup>寒<sup>コ</sup>水<sup>コ</sup>小<sup>コ</sup>漬<sup>コ</sup>此<sup>カ</sup>事<sup>コ</sup>
- 桑<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>種<sup>コ</sup>植<sup>コ</sup>振<sup>コ</sup>此<sup>カ</sup>事<sup>コ</sup>
- 桑<sup>カ</sup>と<sup>コ</sup>地<sup>コ</sup>と<sup>コ</sup>て<sup>コ</sup>益<sup>コ</sup>あ<sup>コ</sup>る<sup>コ</sup>事<sup>コ</sup>





天徳の  
ひさし 林の  
みこしめり  
ちさせの林々  
さう君乃まきめ

桑橋本仕指の事

曰 取本仕指の事

曰 喪送り此事 并 素の病除ふ事

曰 蚕徳道具乃圖解

蚕小沖の事

蚕連を蚕小嵐の用公さる事 附 嵐と防ぐ事

蚕毒忌の事

甚蚕家造り仕指并 蚕友若悪の事

養蚕上八目



日本養蠶始之事

本朝尋於養蠶之起原 天照太神在於天  
上曰聞葦原中國有保食神宜爾月夜見尊  
就候之月夜見尊受勅降已到保食神許保  
食神乃迴首嚮國則自口出飯又嚮海則鱸  
廣鱸狹亦自口出又嚮山則毛麤毛柔亦自  
口出夫品物悉備貯之百几而饗之是時月  
夜見尊忿然作色曰穢矣鄙矣寧可以口吐  
之物敢養我乎迺拔劍擊殺然後復命具言  
其事 中畧 是後天照太神復遣天熊人往看  
之是時保食神實已死矣唯有其神之頂化

為牛馬願上生粟眉上生蠶眼中生稗腹中  
生稻陰生麥及大豆小豆天熊人悉取持去  
而奉進之 中畧 又口裏含蠶便得抽絲自此  
始有養蠶之道云々  
以上神代卷取要此章八人事ヲ以テ造化ヲ明ス  
天人唯一神教仰テ餘アリ

かくわれは養蚕此道と既小神代はゆりの稚産靈日神  
蚕城廻ふらと教ふるひ保食神と眉洗りまゝ一旬して糸  
かくれ道始とありしやねん眉小生と付とけり蚕此  
眉小細まばかりし我蚕のけり糸を糸を見  
絲繰道を始とせねん又推日女尊齋服殿小は  
て神乃沛服成主とせ給ふとや故小此沛神を絲  
綿とて一夜服加護の沛神也崇先を教又神乃



諸雷神人秘訣云

淨教が神を織殿へも不淨此中と甚忌嫌ふかり

保食神の古跡を日向の國志より元來五穀此靈神

御食津小浦一まはは何國小と有らん其炳焉と傳ふ

但馬國小鎮在り白赤養父大明神なり初め水石初光

養父寄つ所小垂跡一の農器を製一の所を疎屋

とふ新藝の所成土平とふ今と土田八本の出来しを

兼地とふ蚕此絲ををを移ふ糸井の郷といふは神

の頂とに牛馬生れりと然は成りや但馬と日本其の

牛を養ふ所なり又は社を善藝の淨神形衆とて

國中の民絲綿を初穂とて持ち祈禱なりと云

宜るり又廣布此小石を戴さゆりて蚕の傍小並て前

狐除守護とん是を猫石とふは淨神最初降除名

地と云書父中號一三月在せし所成三月野と云

神去移す所を大塚といふ中や

因云は淨神を狼狐使令と移す小猪鹿物く他物成ありは時

流く他守の淨委と流陽り田畑の例も立居た狼ありて守る

物成あり其半流く委を神細きだ狼も立去たり又系流の

狼をけしとんを移し其人の後小流を流する半あり人の

りて農業と守りせ給ふ靈物なり又月形建聖堂と云所

大明神と云天竺人神なり其末社小天村君社澳津彦命

神と云者號狐教の淨神なりはあるも宜るり又丹波國

大社又淨委の地を丹波但馬とも云一玉之後世を云

縮と織て産物と云又丹波は天系社を傳拜冊と云る

人多く流で小石と戴き前除猫石と云古くは「大系

書事本記云 天珠棟令の姉市千魂姫命成以て天養媛と定先

天豊岡成冥れ素とありて蚕成飼ふと云











中華蠶始紀

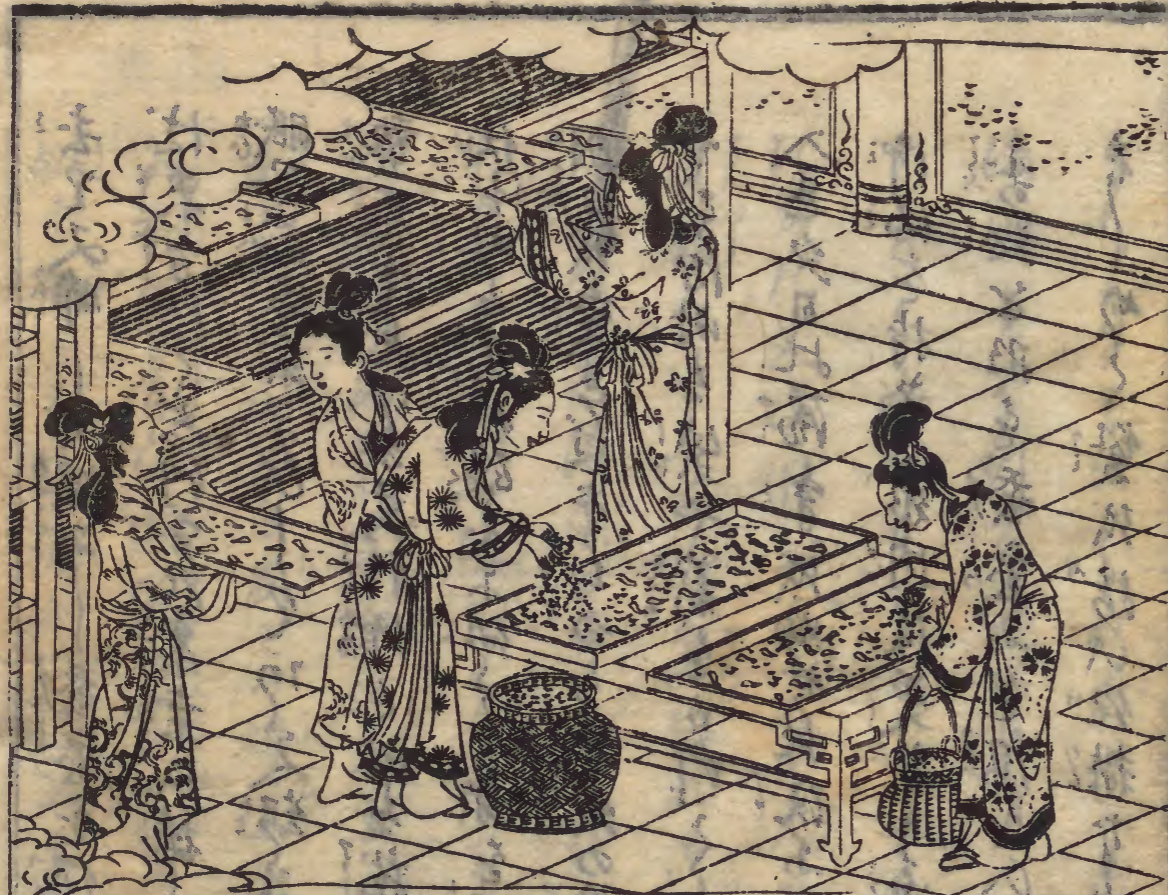
中華にくわ伏犧氏の時始く蚕此節をたたりとや又淮南王  
の蠶經に元妃西陵氏子汝く桑採採りて飼蚕と  
しより一紙に記

禮記月令云

是月也命野虞母伐桑柘鳴鳩拂其羽戴  
勝降于桑具曲植籩筐后妃齊戒親東鄉  
躬桑禁婦女觀省婦使以勸蠶事既登  
分繭稱絲效功以共郊廟之服母有敢惰  
け章は三月ふなれば野虞をく山林田畑を治るるを奉行  
ふ作せく桑柘を伐るはと成制せしは半たり又施乃

翼をうの時言ふむむ蚕此如新水程ちかたは戴勝とよ  
る俗ふ業いそぐれせつふはも此羽うけりた穢ものと見ふが  
おと一其桑の樹ふ宿るは早く蚕と並く所志柘  
あふひと松蓋薦葉だちれものそ種くふ用ふせよせ  
り半かりを治ましむくむりは天子此後ま  
潔齊し給ひみづる桑採採りて蚕成飼せふかり又  
喜蚕の圃は婦女を禁し先務ひを治るふとも停止せ  
ら就其作平生婦人のまこと子業までとくをこれ  
をぬきても抜たれやふし繭ふ形を治縁をこぼしめ  
をのく其いさかり一紙致へそ種くふ業とぬいさ  
勤し給ふかり





此の如き技術先々々々中  
 にも昔蚕乃法を考せぬ  
 かり二月ふがねを庶民小  
 令して蚕を飼ひ先々々々  
 又中春庚午日蚕神を祀る  
 古也あり又種は法海が所  
 新發れうふ所の是小蚕母  
 といふを正しに婦人を附  
 並ふを守りて後世を之  
 三月小糸を撚成りし  
 中此日小糸を撚成りし



宮中  
 蚕と何せ  
 の一國

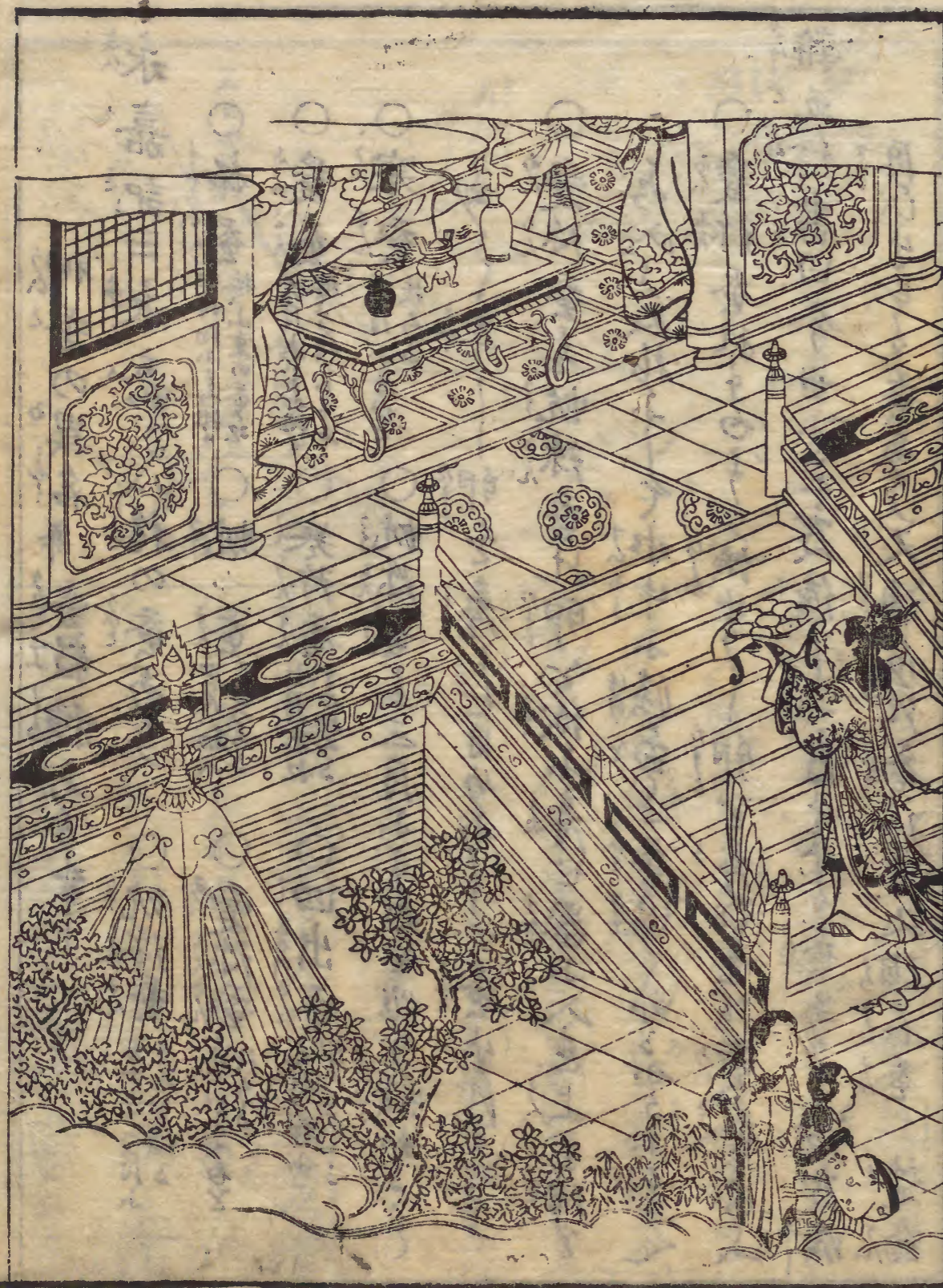
晋楊泉鑿賦云  
 凡物乃生成受ふとりの唯  
 是陰陽の氣和して交して生  
 るを成り卵ありて生るるの  
 ちみふ纏綿して自然り  
 其氣内ふことわり就中蚕  
 と其功大ひかり上を天子  
 后妃乃盛服せり下を庶民  
 の服とりて貴賤の別を以  
 る成り月々王者の夫人の  
 功をたつとみ二官夫人世婦に

養蚕上ノ六









寢廟  
一  
繪  
以  
獻  
下  
子  
圖





神蚕の異名并蚕教種ある事

永嘉記曰永嘉小八種の蚕あり

○杭珠蚕 是は二月小

○柘蚕 四月初小

○杭蚕 四月初小

○愛珠蚕 六月小

○愛蚕 六月末

○寒珠蚕 七月末

○四出蚕 九月初小

○寒蚕 十月小

○杭珠蚕 二月小

○柘蚕 四月初小

卵を産む七日月小して蚕生は之なり

○愛珠蚕と杭珠蚕は卵と紙小産せ器小入上を法

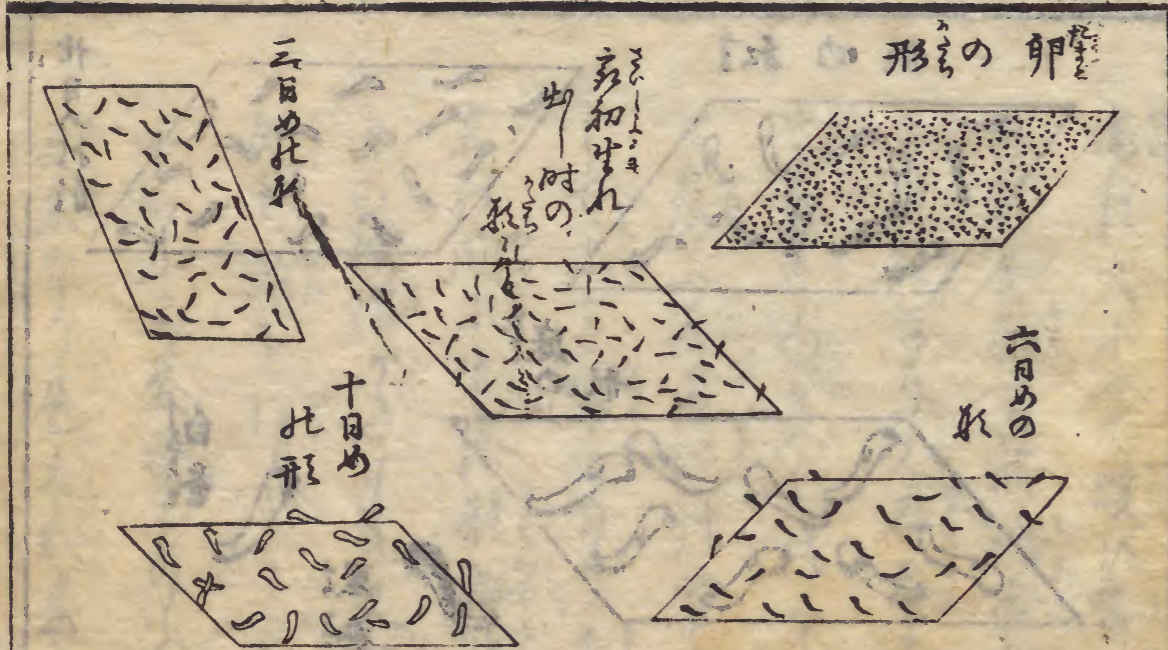
糸入ぬ柘ふして水中小漬蚕と蚕運く如く如く小まる

○愛珠蚕は卵と産むは紙小産せ器小入上を法

雜五行書曰今世小三度俯一皮生する蚕あり又二度俯

再び生する蚕あり又頰白丸蚕あり又頰石蚕 楚蚕

卵の形



黒蚕 灰兒蚕 秋母蚕 秋中蚕

老秋兒蚕 秋末老獺蚕 綿兒蚕

爲れ數品あり丸蚕小大小の異品

有り大の蚕と荊素魯素以て

書小此蚕ハ爲と和素以て

若呉く小の蚕小荊素以て

腹と破る此患あり也

杜陽編曰永泰中此彌羅國碧金

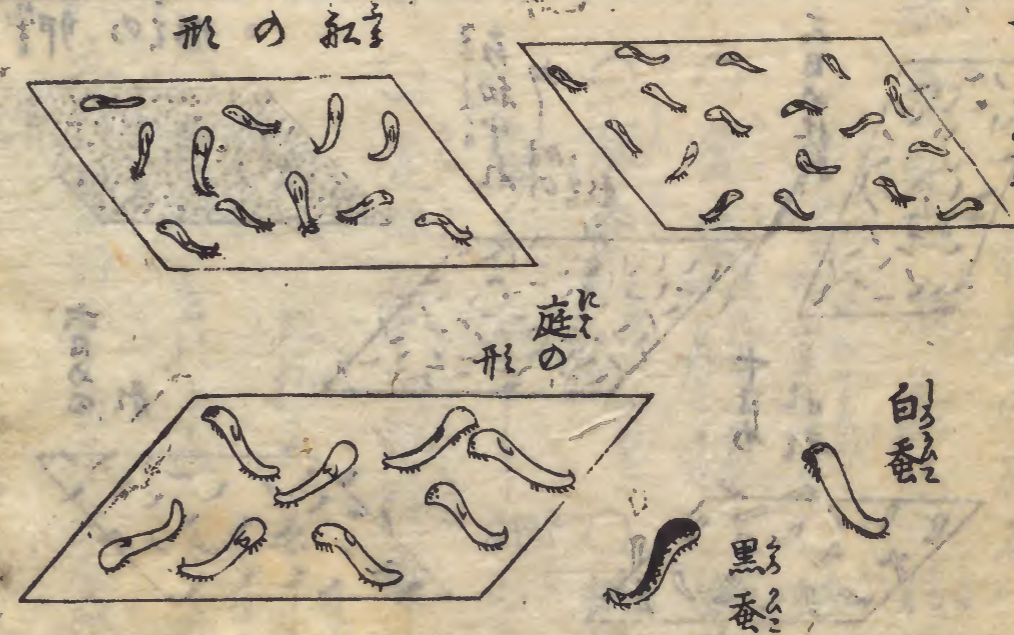
絲と眞を其國小素あり枝

ろりて地を鷹入して大素八十條

丈小なるものと又六丈其枝小蚕あり



北日此形



長四寸斗其色金也其絲之長  
 色小して其絲亦は是尺斗之と  
 其は是丈小と述るとり  
 和漢三才圖會曰中華陰山織眉  
 の二山と雷接を歴世消凡其中  
 小蚕あり雪蚕あり大斗執の如し  
 又水蚕あり負嶋山小生凡長四寸  
 斗其色小して鱗角あり霜雪成  
 度小耐小蘭を流る長六寸斗  
 五色の絲を生凡は絲少く織是  
 不此綿或文綿とらふ小入わく

濡は火小入て燒は弄妙の絲かりむり  
 堯帝北時海人  
 此種を献き其地合からく暖小して和らなりこれ雪  
 蚕此類より又石蚕あり山川の水中に育て石小つれて  
 生んまゆ多く流る釵股の古堂し長サ寸斗其身  
 と度小其色泥此ゆく小して蚕其中小あり春夏羽生  
 して小さ織と有りあ上紙飛鳥又海蚕あり南海の  
 岩此回小生ん形梅指の如く其沙白粉の如し真なる  
 その成得るこり又胎生とて蚕少く生るこりのり  
 母也老を月トうき蓋し神蚕有り又曰原蚕と脱蚕  
 中ら小又夏蚕とら小或は魏蚕熱蚕とら小是皆夏蚕の  
 吳名なり是古武姜此蚕少く再び繭と作る周禮小



蠶の図



原蚕と禁ざるは夏蚕の類へ二匹  
小素糸は二匹採る也へ二匹め此  
芽ごらなり素採たる小のこみ  
採るふよりて夏蚕と採るこ  
今中終小素の類へ所の白繭  
蚕去に夜眠つては夜起る日教  
九三十七八日より十日終ふ  
まよと流るる蚕は項小團字のい  
の字有り又玉羽色は蚕あり又  
黄なるまよと此の蚕ありとれと  
まんことつて又行夏といふは

春蚕あり三十日終ふて繭  
卵を是はまよは皮厚く緑も  
よつ十日終ふて蛾生れ  
是夏蚕の親なりはまよあて  
蛾を出し夏蚕は種を取  
又夏蚕も種を出せばなり  
のま行夏といふ白蚕は種物  
凡繭小長短九角尖等此種有  
蚕まよと成て日教十七八日ふて  
朝の時に蛾出る雄と雌と  
備して静なり是と採分て交合



雄の雌を採る図



さ世朝みつ時より至八つ時まで合せ垂て引をぬし雄と控く雌と  
尿をさ世紙小のせ卵を産せ種ふか紙織を羽ふく凡卵を式百  
に大粒粒産せしを周云本朝禮小雌雄の蝶を用る半ハ子を産じ半ハ何く  
をみわくしと去るを離れ多死と祝をよめ狂織若小尋ぬべし  
雄とに又日逆く死を雌と二三日居く死を又弱き蚕とま白の  
中なる輔織小化しけりかく七八月と経て長サ式お斗れ英色ぬ  
虫中化しま白より暫る是と東國やくはうととる中國  
にていさうとる又がととるけま白を織  
此れ線小取ぐくくま糸となすなり

按むる小美玉本物も蚕此種類甚多し志れども當世  
專世上小善小所の白繭蚕小勝るものか又法草木の  
糸に皆蚕ありて葉と喰ひ絲を吐く物れども天下の衣  
服せすはと素本此蚕の線小志くま此か一故小今世上小

はかん小初小所の法をえくそそ書蚕此規能と後その  
解乃蚕をあげてりらゆるふたしん

天竺霖異大王此事

或書云むり天竺舊中國小霖異大王也天竺舊中國小霖異大王也以ふあり后と光契  
夫人と一人の姫あり金色姫といふ后薨ト移して後大王又  
新く小后妃を具しむふは后妃ぬく姫をにらして父大王小憐  
言し姫を獅子吼とらふ所小控させめふ志り侍小天の加護にや  
有らんけがふくましくして獅子小乗ありて舊中國小帰らせめふ  
よりく又鷹群山といふ所へ控めふは時多く此鷹ども来り因と供  
て姫を育とける大王の后下此より選小傳人女密に姫瓜供せし  
於小帰ふ后又姫れ海と魚と海眼山也り流しりふは時漁



夫婿以助けそのと此故不送り其後不怒く居下に命に沖殿乃  
 庭を深く堀く堀を埋先穀をせり其後土中より光明赫やれ  
 けりとあやしみ大王堀せりその下に彼姫いりて急なくおきり六又  
 素の本れらるや私不棄せ陰海へ流し移りゆふは私日本常陸  
 豊良湊へ流寄ふ浦人其程を助り介抱しけり不幾程もなく彼姫  
 育しくなせり其靈魂化して蚕や成ありとやけ故不蚕初の  
 孫起を獅子の孫起と云二度め此孫起成鷹れ孫起二度めと私の孫起  
 伊及めと庭此孫起といふと彼姫天竺より伊及の難不遇のひり幸と  
 かごとりてかくる若法師一幸と我

蠶種子見振の事

種子と陸分揃うく直一振りて生気強く卵の中おく一層と種  
 の



地合能き有り織のそくし種子の  
 ちりり種く悪き身ひなく種  
 不種落ぞ紙不能取付いと種と  
 志ふべし種を取不織を揃分悪れ  
 様とむくと名付て揃出り一様  
 上中下せ仕分なり種様の後ハ  
 多事なり悪き様此種を下重と云  
 べしむ種の色と其土地の種氣種不  
 種なり赤土地此素は種  
 種がし赤と云ふ又黒土地の素  
 子く何し時と種がし悪きと云ふ



ま土地の素喰一蚕此種を括授多し一七種小糸糸つじごとく日毎  
種を種乃もふふあつた何國もて地面宜し江川筋此場所正素代  
能り或も刈素又いのれ素などにて一畑方此中法をのりて善い一蚕  
の上繭あつた物一蝶瓜採とる一種と病とん其次の種と場脈筋  
切又とる種或もつ種など色々此其名何り又蛾の性魚一れとる  
とふも麦版の魚も似るとして名は布一せや性一れ蛾と白と飯  
のてし一せしと種玉少くとくまもと病んと思ひて一種子は若魚瓜  
吟味もふとる中も一ツの中小蚕二ツ三ツも一折小籠と一たまあつ  
是と糸にさつ耐いゆ一多く物糸結を悪一よりて是と降くと種  
ふとるはたまのあつた取一種子固くより物て夥一は種子と求め  
一人を翌年蚕不採に一と上糸もつとあつた多く物糸と

是とぞ種も又とて種種もつとるこれ其名あり種の中一其年とく素  
と喰上上此種少くと種とを初と一とあつた畑方小糸採あつた又い  
素の穴は不足あるは或い種元魚とる又其家に不在あるは夜後の居起  
に格別の定界小南るは風及此時若小種元も物をはおの年一ツあつた種  
育はに其種蚕変て宜うは種を種元吟味して上種を求む一とて人々  
は種とては蚕の音也去年此のり我運するをゆると一是とてはひが  
なり蚕小種は生あるもの種とる一切の素本とて皆親不似るもの種をい  
樹の種と種て母れ樹とけとるが如し一又年此のりあつて種種もあつた  
蚕と取ふ人も育らんも是と其年のりはく種種もくとお意乃作と  
まねて況や上種と求て畑方一版格別の上種とて種種もい甚見分がたもの  
にて種も一畑方の居起ゆり素責素と一此間もと大なる採意あつた事と





種瓜を水に漬る  
漬る図



蚕種  
行い  
図

種瓜を水に漬る事  
種を寒く漬る事  
ぬくれば又一洗小性弱と卵を生む  
性強きその卵物左蚕生気清う  
又水年又月山風の耐痛がりと  
取はしう漬るる事ありぬ漬る時  
と大鹽小清水を漬る  
養分小衆 養氣清う九朝を種水小  
合そのなりを時を星五の時小月和能  
を身く種瓜あげへ一竿などふ  
けり日陰少く晴きと

蚕種毒忌日竹松此幸  
種子求て湯と紙袋に入是氣の熱ぬ  
中にして其より翌年此毒まうく  
冷しれ所へ約玉を種小骨油氣  
垢氣多系粉の乾漬のふ葉麻の  
子挿腦大毒なり又登ふけまべ  
ゆか或る敷帳帷子小包して大不  
魚一ゆ焼の上不けり一種を蚕  
おぼとそり熱してふけひ熱と物小  
入置り日日の當る不焼火の近所へ  
おの熱一敷てあしれむいと馬じ



桑子植木の事

何玉にくも蚕と書んと思ひ先桑と作ると申肝要なり桑は木の葉  
 大ききして多く能成る桑の向ふ光澤ありて木の色白く生る能桑は  
 け葉は中華にてる魯桑と云ふ又葉少く桑に股有て子と云くは桑  
 を荆桑と云ふ一農業全書小抄より又一洗小桑を桑柘と續ひく  
 其桑桑に似く桑大なる所の何れ作小桑と置桑ともいふ桑と一類なり  
 別物なり山中小育る桑を別ざると非ざるべし又園に多く桑の桑名有  
 中国より魯桑以真桑といふ葉少く荆桑と云板の桑も似たりして小樹  
 桑ともいふ又東國より新田にセオキ田にセオキと云くは桑名あり又上桑  
 此桑と作小桑とては桑と桑の桑多く出本なるものなりよく魯桑と作は法  
 と能く桑と見定五月中の桑桑の實多く能熟しと云と撰む作小取一樹を

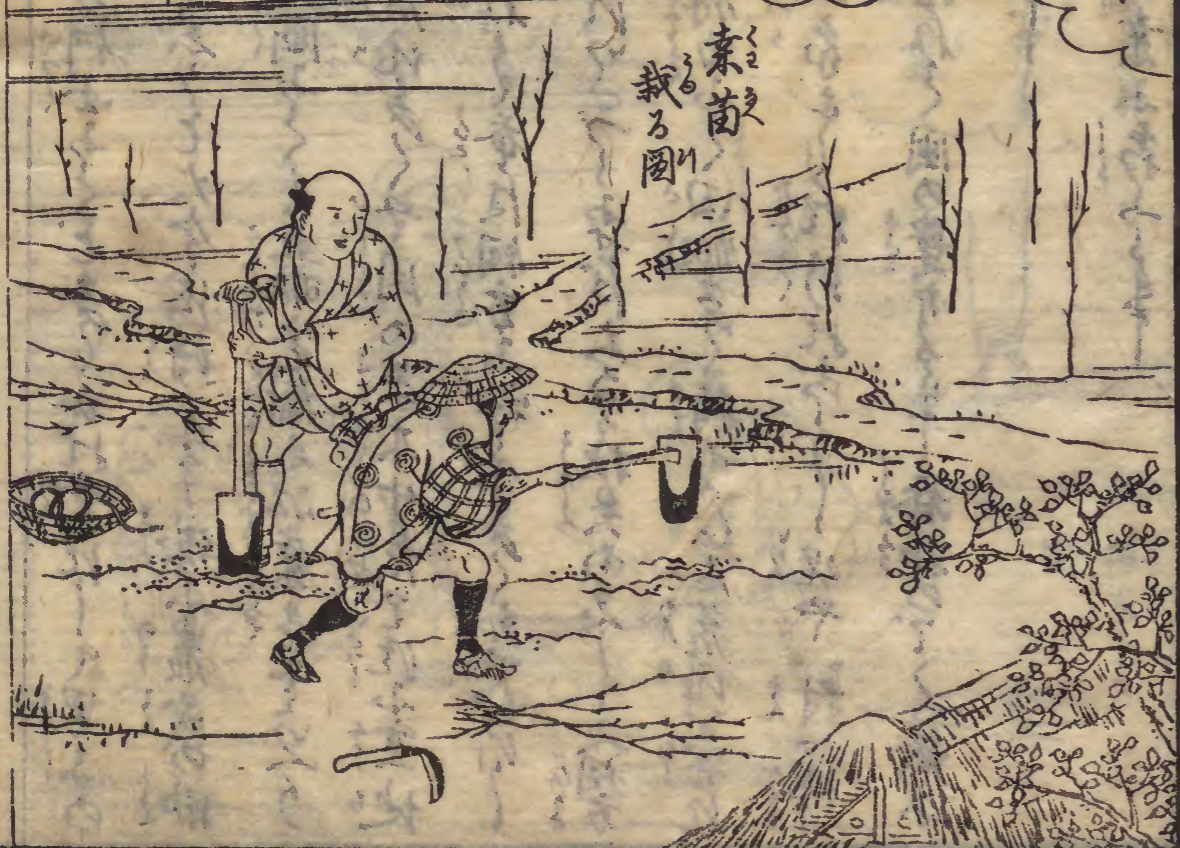
本は中生を熟し末生を採小  
 取て根の支端を切切採く  
 心中と採小取一實の初先の  
 熟桑も成是は採く小桶にお  
 に入れて能洗ひ濁る物と採  
 度小洗しと取小洗小  
 かしませ去地燥と能上田お  
 去と穿まきくてくめんご  
 ありて腐く積取去を  
 がいりりひ糞をいり  
 桑一廿日斗して生出る





此時新初不生也 一皆引種沙小ほきく生也 一と種種沙 一を是小茂く  
 糞を入る 一其年此十月以わち三尺斗小成長まぐ 一又子く生か或は根  
 の皮赤と此物と魚菜なり 一一段まぐ生立根の色白く菜是とく  
 魯菜と志る 一在の上素苗を翌年の春彼岸の頃小地より又六寸上と  
 切て上田小種種種芽立時を株子若芽を本完育作入 一一段く成長  
 を作小種く 一苗の葉付のわたり若芽多く出ると是とおく 一園さかりて  
 真冬中成育川魚 一又素にまぐ少れ其法を素の新素とゆく 一幸  
 あつ是と志入 一取去べ 一種を素痛むものなり  
 素樹を作 一是ある 一幸  
 世小日本二系本八系とあり 一桑は日本の一少 一て名本より桑を  
 作 一根と皮黄より岩此上或は畑越下て耕作もかりぐ 一此去地小栽て

生立本より又川端水を存小種く  
 川際中いともなり土地と砂地又  
 去去地より 一桑を何ごん去小  
 栽はばかり此間小成長  
 一桑 一桑蚕の種桑と  
 一桑 一園く或は荒  
 地荒野を辟き川縁  
 山奥小く桑を若地  
 中より桑蚕の種桑と  
 桑蚕の利源をゆく 一桑  
 尚書大傳云天子諸侯









為ふ向け是中て育一 既小播べ一日度と一 播は小ぬれ入ぬせり小  
 走一又取接成ち打げ入接打とくつふ急これ播はあり今播別山中と云  
 所小流本と接又とけ一 本の上子ゆりて業とん又國く小も上子粒多育  
 乃れ其人不陸く学ぶな一

其時日陰の所より自然と和解毒此種氣の海より時分物目を信る  
 素の芽強く痛まだ又日陰の所よりと種氣の海よりうらふ物日照射  
 急小粒をゆるぬる芽田だる痛む其時と物よく記素に敷くぬれ  
 ちうこれ痛少しせつと又素の根と深く掘て下糞を垂ふ入るは  
 物つ時を痛一 素は十八日固小芽と出り一 其年此種小用立極一  
 去り一 素素と垂ふ毒なりともいふ



取本する圖

素取本仕根の事  
 素の取本を法分能素と見立極中  
 三年固位小打ると素小即り晴天の時  
 地よりを尺程上を切だ一 切株より若  
 芽多く物る是小後々糞を垂べ一  
 翌年の去彼枝と七寸程宛間と垂と  
 若芽を中づゆ一 其時と欠さたり  
 彼枝の系付れ下張あり斗爪あて皮と  
 して疵を付ゆ一 たる若芽と皆上小  
 立押付て圖のてく深く埋免踏と  
 付て地と堅く志免垂へ一 其年此



十月にまで其根を付く埋し其芽の所より根を多く知れり又根を  
 付は其根埋ふ時其根と虫と半生し是取本此根半之明年の虫根  
 と根上ケ種本のごく是中つ小切断し亦小植之是小下葉林  
 退く入也是枝まき水みく八九中ふと成は方なり

桑此虫送り糸素の病を際ふ事

去小切り葉茂る付葉に赤色なる病はく半ありは病國より其  
 あり中國よりいさむる病はく半ありは病國より其  
 其儘は及程多かり蚕小大毒なり又素志み空ふは虫  
 出来素の糸痛む事あり是またたのでく掛取へてかこの虫  
 病はく去地ふと葉根小煤の粒感と苦麦壳等此汗汁を育るものと  
 虫は病がりとりの去蚕幼虫の時桑本に尺とり虫とり虫多

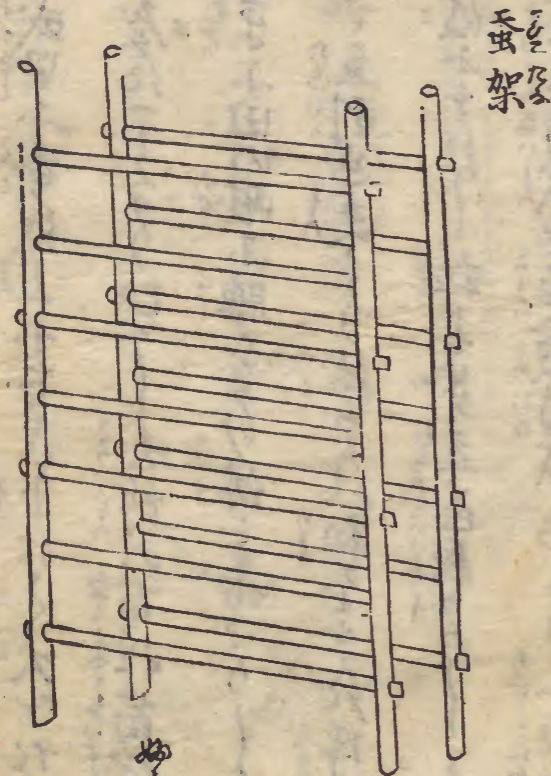


虫おろし此事一日に紙お  
 大已貴命少名命や  
 力とありて天下に終る  
 病をおろし方と  
 定めたる秋昆虫  
 の天異と撮ん  
 たる亦其林  
 厭法成定む  
 ありて神代  
 月のまじ風  
 うま  
 又まじ風の  
 まじまじ  
 五月の日  
 おろしそや見へ  
 したる異國も  
 のまじまじ

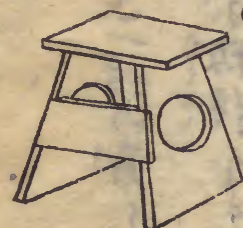








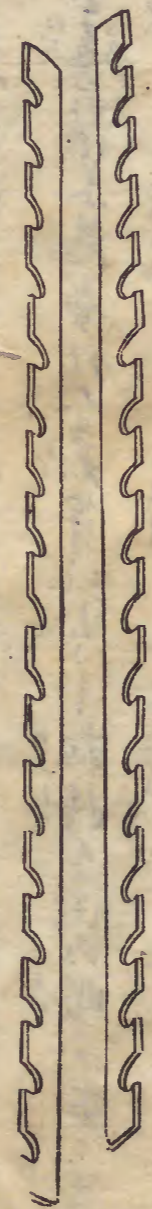
蚕架



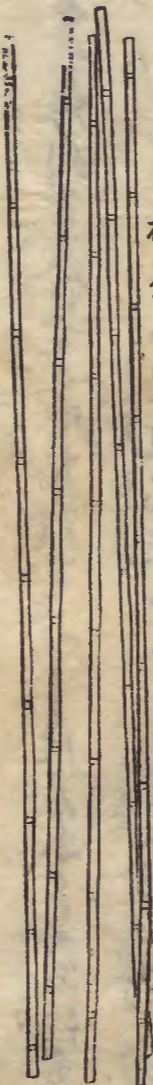
物置



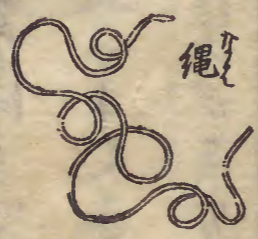
素高梯



たかの立木



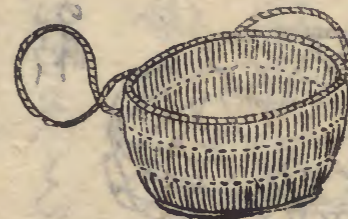
桐竹



縄



糸入  
細袋



素高



てけん



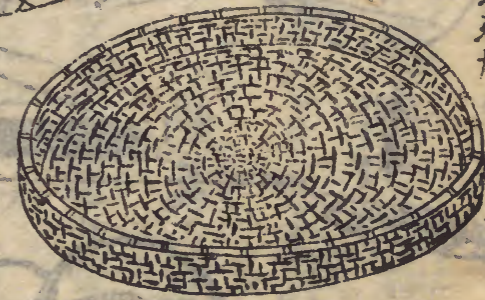
蚕籠



月



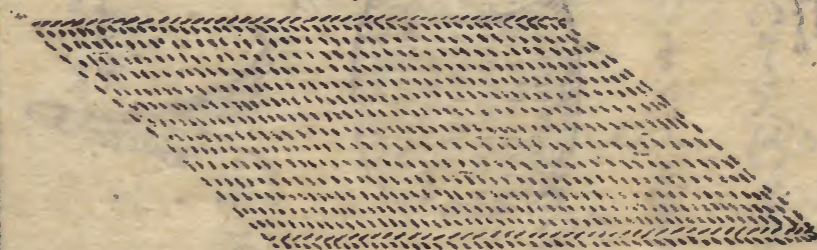
蓆



茶朶



蓆



蓆



蚕小使のしるべき事

或里小蚕代上小蚕之下はく火とたゞ二時のるふ大換せし人あり知れ  
 登れしよりむりむり去所の百姓苗代小親種をせし居る小朋友あり  
 平小田の畦小腰をけ体は居るし小思ひ長崎小なり置後まを居  
 て立別しまより跡り小親をせし居るし小親種をせし居る苗の芽立能く  
 故小まれし親を芽立甚悪りしとや是を二月の以親種はみ小漬  
 其後苗代を播(彼種紙あり)上能種小啼し時右の親種悉く芽を出  
 せしは時を遠く田小為居るを若芽れ出し親種を田の畦小並こ日小  
 干はけし居若芽悉くし其年之は小不居せしせりしゆしてや  
 蚕と生何れく食する中なれを少し其る小を愛れ育をせ半之蚕を  
 掃初の日よりそとひ親親縁若しりとも養飼ふるは若候の味居りふ

とを平小の並ておも  
 てゆり 手扱るれ根之切小扱ふ  
 毎々 終日六十日斗  
 の洗さありれを屋敷を  
 敷して育めへし礼記  
 月令云禁婦女母親前  
 婦使以勸養半と之  
 亦もはむかり物小悪  
 なるその一折小あざり  
 あひまを長崎小時を  
 故し俄小あつとしく



時よりや  
 かりし時乃  
 南大作  
 正秀



素瓜取小走里あるひる葉の極へがと蘇末にー又と葉のあてがひ小ひらりと  
あまねかろう小徳畧の何方して不注がねを年北より我運の魚に極と  
心ゆると故小虫のむりくすねの半の蚕のふも取兵うばはれくはれはきく

神蚕種日蚕小嵐の用をきき半 附 嵐と防ぐ半

蚕種をむて嵐の好物なる嵐北通ひぬる所へけりまらり一六七月より  
その今を七と別して風小嵐川へけり所よりてを二十日種を好小物  
嵐北けりまらり家北内小嵐多くまらはかひ道小嵐あやむとすり  
は赤まは嵐末はむらり又夏のけりまらり紙小色と是と嵐のけり  
所小嵐の恐れくまらむとすり又山小むらり本とすり糸に針のある本あり  
是も所小よりて 是と道小嵐もより一あかひのてくく一と止ぬけと嵐末  
本の表遠有下ー 是と道小嵐の好物と食り小嵐末一

齊民要術云

冬十二月嵐の尾と切生まらり明年正月元朝日の出ざる前小其家  
主彼嵐の尾と切て一附勅屋吏制断嵐虫 付兜文を唱て家内と  
白れむ嵐末らむらり一三時切云嵐散て  
まらむらり

淮南萬畢術云

狐のま眼を狸の陰囊せすり合て嵐北穴とふさげば嵐外へり  
まらむらり

蚕小毒忌何半

芥一たむこのお桂の糞はきたる素山椒の匂ひゆ氣味氣味の本胡桃の本  
枚の末北近所小ある素牛馬の糞付る素うまを焼半熱うとぬき  
臭ひの物焼べうば或と門前などとぬき臭ひの魚肉又ハ糞かじりぬき



まご戸と買べー又蚕石津まけとく赤ふり又赤身赤かり成る  
飯ふりけて死す事有は時をまご桃の糸と火小端とてよりやつふ又  
甲良直はふと糸の糸と掃りけけをりもかーかー糸にひて喰さとも  
り又極との酒を糸に喰ひけ食を團もわり宜し糸不修へー

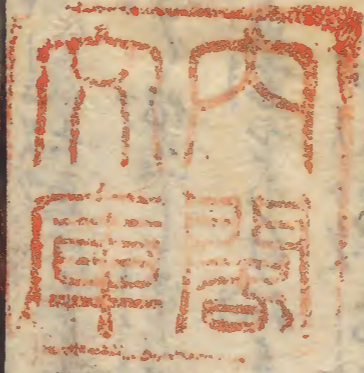
又云蚕幼とて童子此時長サ式半横を半半此虫多く出来蚕と吸ひ糸を  
半あり糸を羽虫とも又け虫多くわく時と川魚又と海魚の緒をいと苦菜  
の苞小入蚕の傍より糸所ふけり糸ー被るけー身と匂ひ小集り  
苞へたふふなり其時疎小苞と取を糸掃る過小持行虫と掃ひ又えの  
所へけり糸幾度も取べーえ束けけーと糸糸年ふかー暖氣成  
年小多りー是も蚕此麻之介とて抜あねを多くかり例年蚕出る  
糸小家用を能く掃除さべーけ虫掃の下杯のおとらけはとらけとらけ

蚕家作仕松の事 附蚕夜苦熱此事

家作と身一異濕を除ふ掃ふ多く掃ふべー空小風抜の穴又と窓多く掃  
東面小に戸と明窓ー南と少れ窓をあけ何事も戸の明窓自由小も  
窓ー日の照りあじも甚熱ー元來秋分四方此陽氣醒く朝入り  
過すやと玉極涼ーさりのわりと夏九ツ前より暖ふかりハツ時分より  
蒸くせと介めくかりの角け乃家作とは別ー夕日の火氣小蚕と  
りて先ちひ小換する半間くある半よりけ家後と為此方樹本と極  
て夕日の火氣をふせく窓ー又窓れとて蚕小屏風など引糸ー又  
と紙帳と入り杯ー格別風の入を止先むさくせほめくれと熱ー  
陽事と豆表時く少く替ねかり種を家内何時も日掃みーと蚕  
蚕とべー熱トて蚕小限くば其道瓜業とするふと一公のそとて



肝要有り甚と苗代風空ワテ時ふより小風吹別一々寒れ事  
 折くあふ一蚕も幼之時を寒さ小痛む一又好め死一神蚕ハ  
 庭起より性悪く成る一又寒さふも痛むる程のほれ蚕も後  
 ぞ病とあふ一ト才一我家此陽氣加減と云ふ事至て大切の事也



養蠶秘録上之巻 終



